

## ふれあいグラウンドゴルフ

いつ—令和 元年6月12日(水)  
9時30分~12時(雨天中止)  
\*9時30分受付

どこで—サン・スポーツランドいなみ

なにを—ふれあいグラウンドゴルフ

参加申し込みは、6月7日(金)~6月9日(日)

先着80名とするが、

グループ申し込み等競合の場合96名か112名。

申し込み—こころ豊かな人づくり稲美町100人委員会 藤本

電話・FAX同じ—492-3495 携帯—080-3108-1881

参加費—300円

賞品いっぱい用意しています、お茶用意しています。

こころ豊かな人づくり稲美町100人委員会主催

## 公開セミナー

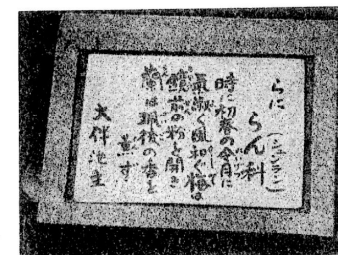
### 新元号令和と私たちの「万葉集」

いつ 6月25日(火) 14時~15時30分

どこで 生きがい創造センター 2階ホール

\* 無料

講師 船越 哲也先生



こころ豊かな人づくり稲美町100人委員会主催

# 船越 哲也 講師

## プロフィール

兵庫県加古郡稲美中学校教諭(社会科) 昭和53年(1978)～  
 同稲美北中学校教諭 昭和60年(1985)～  
 同稲美中学校教諭 平成2年(1990)～  
 兵庫県立歴史博物館指導主事 平成7年(1995)～  
 兵庫県教育委員会東播磨教育事務所指導主事兼管理主事 平成10年(1998)～  
 稲美町教育委員会教育課長 平成16年(2004)～  
 稲美町立稲美北中学校校長 平成20年(2008)～  
 稲美町立稲美中学校校長 平成23年(2011)4月～同25年(2013)3月31日  
 国立大学法人兵庫教育大学教育実習総合センター客員准教授・コーディネーター  
 平成25年(2013)4月～平成28年(2016)3月  
 東播磨地区人権教育研究協議会事務局長 平成29年8月1日～同30年3月31日  
 兵庫県立歴史博物館普及事務嘱託員 平成30年4月1日～

### 主な編著書

『日本歴史地名大系 29Ⅱ-兵庫県の名Ⅱ』(分担執筆;平凡社)  
 『東播磨の歴史 2 中世』(分担執筆;神戸新聞総合出版センター)  
 『東播磨の歴史 3 近世』(分担執筆;神戸新聞総合出版センター)  
 『地名でたどる小さな歴史Ⅱ』(分担執筆;神戸新聞総合出版センター)  
 『加古川・高砂の昭和』(分担執筆;樹林舎)  
 『印南野台地の酒造業・味噌製造業』(指導;稲美中学校地歴部)ほか

### その他;稲美町文化財保護審議会委員

印南野半どんの会会員  
 印南野万葉の森の会役員  
 東播磨地域史懇話会会員

現在

## 新元号令和と私たちの「万葉集」

令和元年6月25日

(はじめに)

・去る五月一日、「令和」が新元号となるや、一時日本中が沸き立った。  
 ところが稲美町においても、万葉の森公園に元号のもとになった一文があることがわかり、新聞・テレビに取り上げられることとなった。

### 1 新元号令和について

・はじめに国書(日本の古典)から採られた。

『天平二年正月二三日、帥老の宅に萃まり、宴會を申す。』

時に初春の令月、氣淑しく、風和らぐ、梅は鏡前の粉

に披き、鬘は俣後の香に薫る。…』

### 【訳】

天平二年(730)正月二三日、帥老(大宰府最高の大伴旅人)の宅に集  
 まって宴會を開く。あたかも初春のよき月、氣は麗らかにして風は穏やか  
 だ。梅は鏡台の白粉のような色に花開き、鬘草は腰につける匂袋のあとに  
 ただよふ香に薫っている。… (万葉集卷五)

※右の序文に続いて当時筑前国の国司だった山上権良や大宰府次官の

小野老ら合計三二人の和歌が詠じられた。

・考察者としてれる中西理さんによるよ、

①『令』= (うるわ) し、』とは、美しもの最上級の表現。これを『和』  
 を組み合わせることで、うるわしし平和を築こうという意味になる。

- ② 漢籍からでなく万葉集から採ったことで国際性に欠けるのではないかという異論はあたらな。この元号のもととなった「梅花の宴」は当時の新文化の窓口だった大宰府で開かれており、梅そのものが外来性豊かな新しい植物であった。
- ③ 「令和」が入っている序文も漢文であり、王羲之の『蘭亭の序』を参考にしているところからも当時の国際性ゆたかな文化をあらわしている。
- ④ 旅人は、当時の都で勢力を持ち始めていた藤原氏のために左遷に近いかたちで大宰帥となった。そうした境遇でありながらこの宴を催した旅人は万葉歌人の中でも際だって優れた品格の持ち主だった。
- ⑤ 西暦は時間経過を示した数字にすぎないのに比べると元号は皆が「こういう時代にしようよ」という目標の意味がある。文化なのである。
- ⑥ 「令和」の序文の作者は複数説があるが、私はやはり大伴旅人だと思う。

## 2 万葉集とは

- ① 飛鳥・奈良時代の歌集（漢詩含む）
- ② 壬申の乱後、天武・持統天皇により新しい中央集権国家体制が本格的に動き出した。
- ③ 「日本」という国号と「天皇」号も正式に定められた。
- ④ この国家建設の隆盛期に自国の歴史、風土、文学について調べまとめる気運が高まった。古事記・日本書紀・風土記はこうして成立した。
- ⑤ 文学では、天智天皇（中大兄皇子）の頃、宮廷中心に漢詩をつくる動きが広まり「懐風藻」（我が国最古の漢詩集）が成立した。
- ⑥ 万葉集は、この時期に本格的に編纂が始まったと思われる。
- ⑦ 四、五〇〇首、二〇巻に及ぶ歌集は多くは舒明天皇の時代（七世紀前半）から天智壬子三年（七五九）までの二三〇年間にわたる歌を採録している。
- ⑧ 歌の内容も各時代を反映して、初期の伝承歌（口讀文芸）、天皇讃歌から抒情歌（恋・旅・四季の感動など）や仏教・漢詩の影響を受けた歌など時代とともに歌風が変化し、多彩な内容となっている。
- ⑨ 特筆すべきことは、一般民衆の歌まで広く集められていることである（作

者名のない「詠み人知らず」の歌は約二千首に及ぶ。

## 2 万葉集の編纂姿勢

- ① いわゆる神話時代の歌は入っていない。
- ② 最も古い時代とされるのは仁徳天皇皇后の磐姫（いわのひめ）の歌
- ③ 巻一の巻頭は雄略天皇の歌

「<sup>な</sup>籠もよ <sup>み</sup>籠持ち <sup>ふくし</sup>もよ <sup>な</sup>みふくし持ち この圃に <sup>な</sup>菖蒲ます児  
<sup>な</sup>琴告らな <sup>な</sup>名告らさね そらみつ 大和の国は おしなべて 我こそ<sup>な</sup>唐  
<sup>な</sup>れ しきなべて 我こそいませ 我こそは <sup>な</sup>告らぬ <sup>な</sup>琴をも<sup>な</sup>名を<sup>な</sup>ら

### 【訳】

かごもよ よいかごを持ち くらもよ よいくらを持って、この圃で 菖蒲を  
 摘んでおられるおとめよ、家をお告げなさいな、名を名乗りなさいな。（そ  
 らみつ）大和の国は、ことごとく私が治めているのだ、すべて私が支配し  
 ておられるのだ。私こそ告げよう、琴も名前も。 （巻一―一）

※雄略天皇は中国の南朝（宋）の歴史書や考古学の発掘成果などから五世紀後半の存在が確認されている。

- ④ 七世紀以後の歌は、歴史上の人物の事件や姿、旅にまつわるものも集められており、歴史書と連った個人の肉声を感じることができる。

## 3 万葉集と印南野

- ① 万葉人から見た印南野の印象
- ② 印南野を詠んだものは七首、それに川、原、海などを付け加えたものを合わせると十三首
- ③ 畿内から畿外に踏み込むとこころ、都から来た者は家からの物理的・精神的距離を感じるところであった。古代の印南野の範囲の考察。
- ④ 野とは本来人の住まない、自然のまま、ゆるやかな傾斜を持つ地の意。広々とした田畑をさす場合もある。

▽行幸に随行した山部赤人の歌(徒櫛歌)

1 やすみしし 我が大君の 神ながら 高知らせる 印南野の 大海の  
 原の あらたへの 藤井の浦に 鮪釣ると 海人船騒き 塩焼くと 人そ  
 きはにある 浦を良み うべも釣はず 浜を良み うべも塩焼く あり  
 通ひ 見さくも著し 清き白浜 (巻六一九三)

【歌】(やすみし) 我が大君が神として立派にお治めになる印南野の大海の原の(あらたへの)藤井の浦に、鮪を釣ろうとして漁師の舟はせわしなく動き回り、塩を焼こうとして人が集まっている。これは藤江の浦のよき、浜のよきにある。この清き白浜に天皇がしばしば通つて、魔になるのももつともだ。

《反歌三言》

2 沖つ波辺波静けみ漁すと藤江の浦に船を騒ける (巻六一九三九)  
 ※辺波：岸の波

3 印南野の浅茅押し並べさ寝る夜の日長くしあれば家し思はゆ  
 【歌】印南野の浅茅を押し解かせて仮寝する夜が幾日も続くので、家かしきりに思はれる。(巻六一九四〇)

4 明石瀉瀬十の連を明日よりは下突ましけむ家近づけば (巻六一九四二)  
 【歌】明石瀉の瀬の引いた海辺の道ではあるが、明日からは心遣いごとだつて。家が近づくので。

※この時の徒櫛歌には、辛朝臣金村のものもある。こちらには「名守

隅の船瀬」(現在の江井ヶ島瀬、淡路島の「松帆の浦」(淡路市松帆)などが歌われている。

万葉と令和・印南野 関連年表

西暦	年号	記	事
421 ~478		倭の五王(讚・珍・武)が中国の南朝に朝貢する	
645	大化元	中大兄皇子、中臣鎌足ら蘇我氏を滅ぼす	
663	天智2	白村江の戦	
668	天智7	天智天皇即位	
673	天武2	天武天皇即位(壬申の乱の翌年)	
710	和銅3	奈良へ遷都=平城京	
712	和銅5	古事記成立	翌年、風土記の編集・提出命令
720	養老4	日本書紀成立	
724	神龜元	2.4聖武天皇即位	
726	神龜3	10.7~10.19 聖武天皇の印南野行幸	
726	神龜4	大伴旅人、太宰帥となる。	
729	天平元	長屋王の変 光明子、光明皇后となる。	
730	天平2	正月、梅花の宴。12月、旅人帰京。	
731	天平3	大伴旅人、死去。	
737	天平9	疫病(天然痘)により藤原四兄弟死去	
740	天平12	9.3藤原広嗣の乱起こる	
		12.15 恭仁(くに) 京遷都の詔	
741	天平13	国分寺建立の詔	
742	天平14	紫雲宮をつくる	
743	天平15	大仏造営の詔	
744	天平16	難波宮を都とする	
745	天平17	5.11都を平城京に戻す	
749	天平勝宝元	7.2 孝謙天皇に讓位する	
752	天平勝宝4	4.9 東大寺大仏開眼供養	
759	天平聖武7	この年以降、万葉集成立	

(3)自然観賞・歌枕などとしての印南野

▽自然観賞の歌

「家にして我は恋ひむな印南野の浅茅が上に照りし月夜を」

(巻七一一七九)

【歌】家に帰って私はなつかしみ恋うことだろうな。印南野の浅茅の上に照つていたあの月よと。

※印南野行幸に随行した者の作歌ともいわれる。